ストリートで授業する：

2008-2009年度明治学院共通科目「ボランティア実習101」Go Westの記録

猪　瀬　浩　平

1　危機の再―導入

「文化というのは，危機に直面する技術である」と言ったのは，文化人類学者の山口昌男である。しかし現実を見渡してみれば，文化は，普通，危機を回避するためのものとして考えられている。たとえば，公園に危険な遊具はなくなり，路上での焚き火は禁止され，数多の危機管理マニュアルがつくられ，世間は予定調和に覆われている。そこに，想定外の危機が襲いかかり，混乱が起こり，その混乱が終息したころに，またその危機を回避するシステムがつくられる。2009年に新型インフルエンザに世間が翻弄される一連の騒動をみれば，私たちが危機に直面する技術を，山口に従えば「文化」を，失っていることを理解するだろう。個人のプライバシーなど吹き飛んで，マスメディアが一人一人の感染者の行動軌跡まで追うあの凶行を，そして店頭から束の間に消えたマスクを，そしてその後の過剰な防備策を，思おう。

大学という空間にしても同様に，危機が回避されようとしている。学生のビラまきは禁止され，立て看板ひとつ立てるのも，壁に展示をするのにも，一つ一つ事務の許可をとらないとできない。学生が自由に寄り集まり，時間を気にせず議論し，時に無為に過ごせる場所は極度に限られている。あるいは，外部への説明責任を果すために，第三者評価や，学生による授業評価が導入されている。例えば，学位授与の基準としての「学士力」。「他の先進国では『何を教えるか』より『何ができるようになるか』を重視した取組が進展」しているが，「我が国の大学が掲げる教育研究の目的等は総じて抽象的」であり，「大学の多様化は進んだが，学士課程を通じた最低限の共通性が重視されていない」という「危機」を回避するために，どの大学でも培うべきものとしての「学士力」が設定されようとしている(1)。導入する側も，導入させる側も，これらの取り組みによって，それぞれの認識する「危機」を回避しようとする。学生運動がもたらした混乱へのトラウマが，あるいは政財官界からの突き上げが，あるいは学生自身が似たもの同志で固まる同質化の傾向が，大学を危機を回避するシステムの構築に邁進させている。

しかし，結局，そのこと自体が，未来に引き伸ばした更なる「深刻」な危機をもたらしはしないのだろうか。

明治学院大学共通科目「ボランティア実習101」Go Westを開講するにあたって，僕の頭にあったのは大学教育に「危機」をあえて再＝導入するということであった，と思う。ここで言う「危機」は，「眼を見張るような状況」と言い換えても良い。

P. M. シュールは「驚異とは，何よりまず眼を見張ることである。しかし，それはまた，ありそうにもない作用，運命を立て直す作用なのである」と指摘する。この「眼を見張る」行為のなかにこそ，自らの身体性を含めて基盤となる価値観が疑われ，そこに自己変容の契機が潜む（シュール 1983；小松 1988，128 頁）。

頭や理屈で理解するのではなく，全身の感覚を刺激するくらい対象に密着すること，その中で自らの価値観が解体され，新たに更新されることを手に汗を握りながら期待する。シュールが提示するこの深い交わりがもたらす「驚異」は，リチャード・セネットの言う「無秩序」につながる。釜ヶ崎をフィールドに活動する地理学者，原口剛は，セネットの『無秩序の活用』によりながら，青年期の不安と挫折について，次のように語っている。

> 重要なことは，不安と挫折を経験した後に，どのように生きるか，という点だ。もっとも典型的なパターンは，自らを諦め，既存の社会秩序や権威に身をゆだねる受動的な生活に退行するものだ。そして，これが公共性の喪失を決定づけるものとして，数々の著作のなかでセネットが批判する態度である。
>
> だがもし人が不安と挫折を経て，いかなる社会でも対人関係における苦痛と無秩序を避けることができないことを受け止めるとするならば，それは一転して他者を理解し，そこから公共性を育む力となる（セネットはそれを可能性としての成人期と呼ぶ）。そこから生まれる態度を，セネットは「気にかける」ことと呼んでいる。「気にかけられる事柄や人物が，個別的で特殊なものになればなるほど，一層それを気にかけるような可能性と自発性が増大する……こういうわけで，成人のアイデンティティの達成は，人の力の条件なのであり，個人は，自分を傷つけるかもしれない個々の直接的な事柄を気にかける力を発達させるのである。挫折の経験によってアイデンティティの首尾一貫性を揺るがされることで青年は，相容れない他者に気をかけ，理解しようとしはじめる」。このとき人間は「新しくそしておそらくは苦しい意味を吸収する能力」や，「しっかりとコントロールできない状況へ自分を投入していこうという自発性」といった新たな力を身につける。この成人期にあって，かつて青年のアイデンティティの首尾一貫性を脅かした無秩序や他者性をむしろ，人間の公共性を押し広げる可能性に転化するのである。（原口 2009: 57）

山口の指摘と重なるように，原口は青年期に訪れる危機を避けるのでなく，アイデンティティの一貫性が破たんする危機こそが，人間の公共性を更なる他者に広げる可能性を持っていると指摘して，積極的に評価する[(2)]。このような危機が起きる場として，原口は「都市」を設定する。

> 都市はそのような可能性に満ち溢れた場である。しかし人は往々にして，都市がもつ可能性から逃避し，それを台無しにしがちだ。そこで，無秩序から公共性を育むような場所をどのようにつくるかという点が問題になる。「青年にとって社会的な問題は，依然として，経験と探求のために解放された公共の場をどこに見出すかである。これが，現代の都市を計画する際の真の仕事であると私は考えている。都市の病根は（…）人々が成長し，成人が真に社会的な存在としてあり続けられる場所を提供するという人間的なものなのだ。（原口 2009: 57–58）

そして僕らは，旅に出た。大学という「安全」な場所から飛び出した。

そこで手に入れようとしたのは，危機を回避するのではなく，危機に直面する技術である。

2　Go West の設計

2-1　大学教育の中での枠組み

Go West は，明治学院大学共通科目「ボランティア実習 101」のうち猪瀬が担当するものの通称である。ただし実習に至るまでにほぼ一年の準備期間があり，また終わった後も報告会の準備や報告書の作成が秋学期間続く。実習に参加した多くの学生が，一連のプログラムが終わった後も，担当教員である僕や，訪問先の人との関係を切らしていない。

一連のプログラムは，秋学期に「ボランティア特別研究 101」から始まる。ここで「ボランティア実習 101」に参加するための基礎的知識や身体技法を学ぶ。この段階では 20〜30 人の学生が履修している。ほぼ全員が 1 年生であるが，2 年生以上も履修可能である。講義だけではなく，ゲストによる講演や，アート[3] をめぐるワークショップなどを行うとともに，大学のキャンパスすらも飛び出して僕が事務局長を務める見沼田んぼ福祉農園で農業ボランティア体験を実施した。

ボランティア特別研究 101 を履修したうちの希望者が，翌年の春学期にボランティア特別研究 102 を履修し，授業の中で教員と相談しながら，ボランティア実習に向けた準備を夏休みまで行う[4]。ここでは，訪問先に関する文献購読を行い，現地の抱える問題の予備学習をした。合わせて，見沼田んぼ，郡上八幡，釜ヶ崎の各訪問先に担当者を決め，受け入れ団体との交渉を行いながら現地での行動計画の立案を行うとともに，保健や記録，交通，会計，しおりなど実習中に必要な役割分担をし，それぞれ準備を行った。また授業時間外では訪問先の郡上八幡の人や大阪釜ヶ崎の人が関東にやってくる機会を使って，出来る限り接点を持つようにしている。ボランティア特別研究 101 の段階よりも履修人数が少なくなり，コミュニケーションも深くなるとともに，学生が主体的に学習する時間が増える。授業でのディスカッションや，準備の過程は逐次メーリングリストで報告される。教員である僕は，授業時間やメールを通して，適宜学生の行動・発表にコメントするとともに，受け入れ団体の負担にならないよう，学生の渉外過程を補助する。

そして，夏休みに入り，見沼田んぼ福祉農園で見沼・風の学校が主催するサバイバルキャンプから，ほぼ半月間にわたる Go West が始まる。2009 年度の訪問先は，埼玉県のさいたま市にある見沼田んぼ福祉農園に 1 週間，郡上八幡に 5 日間，そして釜ヶ崎に 4 日間であり，郡上八幡と釜ヶ崎は 7 日 8 日の一連の旅になる[5]。西へ西へと向かう旅なので，この実習の名前を Go West と命名した。

実習参加者は，次の秋学期に，更に「リサーチ＆プレゼンテーション 1B」を履修する。ここでは，実習終了後に提出したレポートを踏まえ，教員―受講生間でディスカッションを行い，追加調査を行いながら，問題意識をさらに掘り下げる。そしてボランティア特別研究 101 の学生の他に，一般にも公開した報告会でのプレゼンテーションを準備するとともに，報告書の作成を行う。

以上が，Go West をめぐる一連のプログラムの概要である。

2-2　Go West の行動記録

実際の Go West はどのように行動したのか。

「Go West 2009　自治なるものをむすぶ旅」を例に見てみたい。

まず8月9日から15日までは，見沼田んぼ福祉農園でサバイバルキャンプに参加した。キャンプは，見沼・風の学校の社会人，学生ボランティアスタッフが企画・運営し，Go West参加者も安全講習を含めて準備段階から参加し，保健係や記録係，清掃係などの役割を持って活動した。中には全体の料理長を任される人や，一日の行動を考えるプログラムリーダーを任される人もいた。

全体の参加者は，法政大学，埼玉大学，静岡大学などの大学生や近隣の中学生，「社会人」，「フリーター」など35名。農作業に加えて，福祉農園で活動する障害者団体ぺんぎん村のメンバーとの共同作業や，ぺんぎん村のシニア農園ボランティアによる畑講座や，わくわくメンバーとの共同作業を行った。また見沼田んぼ内で営農活動を行う若手農業者のもとで援農活動を行うとともに，彼らを夜の勉強会に招いて見沼田んぼにおける農業の現状について話を伺った[6]。

一週間テント泊，朝5時起床，風呂は男はドラム缶風呂か事務所のシャワー，女は近隣農家で借り，個人の時間はほぼなしという過酷な条件だったが，事故もなく全行程を終えた。Go Westメンバー全員が全日程を参加したおかげで，メンバー内での一体感が生まれるだけでなく，風の学校スタッフとの関係も深まった。また今年は全員に自分の役割が振られていたため，主体的に役割を果す姿勢が次第に生まれ，指示の声が飛び，仕事の段取りができるようになった。

8月17日にミーティングを行った後，8月18日に関東を出発し，郡上八幡に向かった。18日は郡上八幡に到着したのち，昨年のGo Westで出会い，白金グローバルフェスタ（後述）でお手伝いした本町の上田酒店を訪ねた。その後浴衣に着替えて，下愛宕町で行われる十八観音祭の縁日おどりに参加した。19日は郡上おどりを支える郡上おどり保存会の会長の藤田政光氏のお話を伺った。その後，グループ毎にテーマを決めて郡上八幡の町歩きを行った。夜は郡上おどりの団体おどりコンクールに参加した。20日は朝から，本町自治会が取り仕切る宗祇水神祭りに準備から参加した。日本百名水にもっとも早く認定された宗祇水の周辺の清掃や神事の準備を行うとともに，本町発展会が主催する水中花火や浴衣コンクールの会場設営やお囃子が乗って演奏するための櫓の移動を，本町の方々と行った。21日は，宗祇水神祭の片付けを手伝うグループ，戸塚まつりに毎年ゲスト出演しているお囃子集団郡上舞紫のメンバーで，花農家を営む河合研さんの家に援農に行くグループ，郡上高校へ訪問し，郷土芸能同好会の若者と交流するグループに分かれて行動した。夜はお世話になった方々に集まっていただき，晩御飯を食べながら交流会を行った。

翌日は朝に郡上八幡を出て，バスと電車を乗り継ぎ，さらに西へ向かった。釜ヶ崎に向かう途中に，京都により，京都大学へ向かう。非常勤職員が3年間で契約を打ち切られ，解雇されるようになったことに抗議し，実際首切りにあった人びとが大学キャンパス内をスクウァットして営む京大くびくびカフェを訪問し，カフェの方々と交流した。その後，カフェの方に案内いただき，京都大学内の自治寮である吉田寮を見学し後，釜ヶ崎に向かった[7]。この日，学生は3畳一間のドヤ（簡易宿泊所）に分かれて泊った。雑魚寝だったこれまでの生活から一転し，質素で最低限の設備しかない一人部屋に変わった。

翌22日は釜ヶ崎の受け入れ団体である，NPO法人こえとことばとこころの部屋（以下，「ココルーム」）が運営するカマン！メディアセンター

のスタッフに釜ヶ崎の状況について講義していただいた後，あいりんセンター，ドヤ，西成市民館，サポーティヴハウス，こどもの里，三角公園など，町の様々な生活拠点を案内してもらった。午後は，大阪城公園へ電車で移動し，地理学者の原口剛氏が運営する「青空大学」主催のパペットづくりのワークショップに参加した。このワークショップは，表現の自由を求めることを目的とし，各自が自分の暮らしに欲しいものを，段ボールを使ってパペットにして表現する。ここには，大阪城公園の野宿者を支援している人びとや，神戸大学の学生ツアーの人びと，ココルームに出入りしている人びとなど，様々な人々が参加していた。その後，できあがったパペットを持ち，それぞれが楽器を鳴らしながら，天満橋までの公道をデモしながら歩く。夜は，ココルームが主催する社会学者で，日本ボランティア学会会長の栗原彬氏の講演会に参加した。

23 日は朝から，釜ヶ崎の様々な福祉・労働者支援団体の活動にそれぞれ学生が参加した。高齢者特別清掃[8] に参加し，高齢の日雇い労働者と一緒に町の清掃する人，釜ヶ崎や周辺地域でこどもの居場所づくりをしているこどもの里や山王こどもセンターで一日ボランティアをする人。今までの集団行動からここでは基本的に個人行動になる。夕方には，日中それぞれの現場の人からの聞き取りをもとに，その人と土地との結びつきを表現する詩をつくり，朗読するワークショップ「こころのたねとして」を行った。その日の夕刻，商店街の人通りの多い道に面したカマン！メディアセンターを舞台に行った朗読会では，詩に詠まれた人ばかりではなく，通りがかりの人が立ち寄って人だかりができた。題材になった人の中には，学生の詩を聞いて涙を流している人もいた。その後，ココルームが定期的に行っている山王地域の夜回りに参加し，野宿している人に，おにぎりとお菓子を提供する活動を行った。

最終日の 24 日はこれまでの旅の取りまとめをし，その後ココルームのスタッフの人びとに講評をもらって解散になった。

このような半月にわたる実習である。

2-3　訪問した場所の特性

訪問先の見沼田んぼ福祉農園，郡上八幡，釜ヶ崎それぞれ，固有の課題と可能性を持っている場所である。

見沼田んぼ福祉農園は，放っておけば荒廃地化する都市近郊の遊休農地の活用のために，農家以外の多様な人々の協働の中で，営農活動を行いながら，見沼田んぼの保全・活用・創造を行っている。活動の中心は障害者であり，そのため彼らの職業自立や地域生活の豊富化というミッションも持っている。

郡上八幡は中山間に位置する観光地で，伝統的町並みや郡上おどりをはじめとする文化・芸能によって多くの観光客を集める。水管理や神事などの地域の活動については，頼母子をはじめとする共同組織，自治組織が存在している。その一方で，観光客の増加による地元民の踊り離れや，高齢化による文化的伝統の衰退などの問題も起っている。

釜ヶ崎は，日本最大の日雇い労働者の町であり，産業構造の末端で不安な位置に置かれる人びとが寄り集まって暮らす町である。現在，高齢化した日雇い労働者の孤立や，日雇い労働自体の減少によるホームレスの増加などといった問題が起っている。そんな中で，1999 年以降，労働者支援団体，住民組織，ドヤオーナー，大学など，それまで対立するか，交渉のなかった団体・個人が，地域再生に向けて連携する動きが少しずつ起きている（水内 2008）。

ボランティア学を受けている学生に対して，僕はボランティアとは「自治」であると伝えている。つまり，地域や共同体が抱える問題を，行政に頼るのではなく（もちろん連携はする），また営利を目的にするのではなく（もちろん経済的基盤は模索する），自発的に解決しようとすることを，それに連なる行為をボランティアと捉えてみる。そう考えると，見沼も郡上八幡も釜ヶ崎も，それぞれが課題に向き合いながら，地域の外の人も含めた多様な人々と結びあいながら，その解決を図ろうとする自治＝ボランティアの現場であると言える。

3　Go West の原理

3-1　出会いから，継続する関係へ：すばらしい，でも一度きりの体験にしない

次に，このプログラムを作り出していく前提として，僕自身考えていたことを書きたい。

明治学院大学に着任し，ボランティア実習の授業を任されるまで，僕は学生を出す側ではなく，受け入れる側にいた。3 年間にわたり，僕がボランティアスタッフをしている見沼田んぼ福祉農園には，夏休みに地元の国立大学から 10 人前後のインターン学生が派遣されてきた。彼らは 10 日間前後農園にやってきて，平日の障害者団体の活動に参加したり，休日のボランティアスタッフの活動に参加したりしながら，農園ボランティアの体験を行った。半分以上の学生が，Go West が後に参加することになるサバイバルキャンプにも参加し，真夏の一週間の過酷な日々を農園の人々と過ごしていた。

そんな濃密な日々を過ごした彼らだったが，実習が終わると，ほとんどがそれっきりになってしまった。確かそのまま農園のボランティアスタッフになる人もいたけれど，それはごく少数のことだ。特に個人的な挨拶もなく，終わった後に冊子になったレポートが届くだけだった。実習の報告会は，平日の昼間に大学のキャンパスの中で開かれた。都合がつかないので，参加したことはない。

担当教員は，実習の前に一回，実習に一回畑にやってくるだけで，そこで言われるのは，「学生に○○をさせないでくれ」という注意や，「近頃の学生は○○だから」という愚痴ばかりだった。

このように書けば，学生の派遣元である大学の側にも，また派遣された学生にも言い分があるだろうし，そしてその指摘はある意味においては正しく，また受け入れ団体としてのこちら側に不十分な点があった点も否定できないと思う。それでもあえてこんな不躾なことを書いた上で事実として伝えたいのは，このインターンプログラムの中で，大学，学生，受け入れ団体に「信頼」の関係が存在しなかったということである[9]。学生の報告会に招かれるだけで，受け入れ団体の声を聞く場はもたれず，プログラムを担当教員，学生，受け入れ団体で改善していく回路は閉ざされていた。かくして，学生の受け入れは 3 年を持って終わり，学生には単位が残り，大学には地域のボランティア団体に学生を派遣したという実績が残り，そして農園には，綺麗にまとまったレポートの束だけが残った。

学生を派遣する側になり，この轍を踏まないために，学生，教員，受け入れ先の間に，ひと夏の体験で終わらない継続的な関係にすること，それによって信頼の関係を生み出すことにまず留意した。その結果，8 月の訪問前に，Go West でお世話になる人達と東京や横浜で出会い，一緒に働く場をつくった。

例えばその一つが，5 月に行われる学園祭「戸塚まつり」における郡上おどり公演の受け入れで

ある。2008年5月から始まるこの公演において，Go Westに参加予定のメンバーは，受け入れ側として，郡上八幡から呼んだお囃子グループの公演の裏方を行い，また彼らをもてなす側に回っている。

また2009年5月には，白金地域のボランティア団体である白金志田町倶楽部が主催する白金グローバルフェスタでは，Go Westの参加メンバーが，初参加した郡上八幡物産店の手伝いをしている。

この結果，実習時に郡上八幡を訪問する際には，すでに顔なじみが何人も出来ている状況になっている。また白金グローバルフェスタにおいて，本町商店街の方との間で信頼関係が生まれることによって，8月の実習の際，地域の神事である「宗祇水神祭」にも参加し，運営の一部に携われるようにもなっている。

3-2　Go Westの学習論：正統的周辺参加から，生き方の人類学の実践へ

文化人類学者のJ. レイヴとE. ウェンガーは，「学習」概念を具体的な社会的文脈に適用な形として定式化している。彼女らは，個人が単独で命題的知識を獲得していく過程とした従来の学習概念を批判し，伝統的徒弟制をモデルに，新参者と古参者，技能，アイデンティティ，利用される道具や知識の関係の集合として，実践共同体 *communities of practice* という分析概念を打ち立てる。ここにおいて学習は，実践共同体の周辺に正統的，全人格的に参与し，熟練のアイデンティティと身体技法の獲得により，十全な参加者になっていく過程，及びそれによって実践共同体が再生産されていく過程と定義される。これが，正統的周辺参加 *Legitimated peripheral participation* の過程と言われる（レイヴ＋ウェンガー 1993）。

学習についてのこのような枠組みを採用することで学習者が，単に明晰な知，形式的な知ばかりではなく，暗黙知や身体知をも習得していくプロセスを具体的に把握することが可能になる。同時に，他の行為者と出会い，次第に彼らに認められていく過程や，自分自身がその実践共同体内のアイデンティティを確立する過程が，分析の射程としてとらえられるようになる。

つまり，単に「ボランティア」をめぐる知識を大学で学ぶのではなく，ボランティアをする団体の活動に実際に，継続的に参加することによって，団体が定款やニュースレター，ホームページで公表している公的な情報ばかりではなく，団体の実践にかかわる身体技法（例えば，「鎌で草を抜く⇒熊手で集める⇒堆肥場まで一輪車で運ぶ」など）を身につけるとともに，公表されていない暗黙のルールや役割（例えば，「団体の会長はこの人だが，実際の活動の決定権を握っているのはこの人」など）をも学んでいく。それらの様々な知識を習得していく過程で，団体の構成員との間に信頼関係が生まれ，また自分の存在が認められていく。それによって，新参者から十全参加者へ次第に移行していく。

一方で，レイヴらの議論には限界も存在している。レイヴとウェンガーらにおいて「正統的周辺」とは，「複数の共同体の結び目」として考えられる（レイヴ＋ウェンガー 1993: 11）。そして，この位置に立つことで，新参者は，実践共同体の道具や知識の配置の全体像を反省的に把握し，より高次の技能や知識を習得することが可能になる。しかしこの枠組みにおいて，複数の実際共同体の結び目に立つ行為者が，如何なる葛藤を抱えるのかについては曖昧なままである。その結果，田辺繁治が指摘するように，実践共同体内部でのアイデンティティ獲得と共同体自体の再生産に焦点を

あてるこの枠組みでは，実践共同体の周辺に参加しながら，そこに同一化できない個人の経験を捉えることができなくなる（田辺 2003: 228）。

これらの点を踏まえ，田辺は実践共同体（田辺の言葉では「実践コミュニティ」）に参加する諸主体が，その中で起こる権力関係も含めた交渉を通じて，不断に己の生き方を構成していく「アイデンティティ化」の過程を明らかにする，「生き方の人類学」を提唱している。

Go West において，参加する実践共同体は複数存在する。見沼田んぼ福祉農園，郡上市八幡町の本町商店街，そして大阪釜ヶ崎の NPO 法人こえとことばとこころの部屋。またそれぞれの実践共同体は，更なる複数の実践共同体の結び目になっており，中心がどこにあり，外延がどこにあるのか，必ずしも明確ではない[10]。その複数の実践共同体に，あるいはひとつの果てのない実践共同体に参加する中で，参加者たちは自分の生き方を問い直していく。以下，Go West に参加した学生のレポートから。

> 本当はレポートを書きたくない。なぜなら，レポートを書いてしまったら完結してしまう気がするから。私 Go West の旅を終えてボランティア学の授業が終わったなんて思ってもいないし，むしろ，この旅で自分の知らない世界に飛び込み，新たな問題を掴んできたんだと思っている[11]。

彼女はこの後も，見沼や釜ヶ崎，郡上八幡を訪問し，また静岡の山梨みかんトラストファームには自分が企画の中心になって Go West を履修する学生やそれ以外の学生と一緒に訪問している。

3-3　贈与ということ

それぞれの実践共同体に参加する期間は，授業という枠組みの中に限定すれば限られることになる。そんな中，束の間の関係にしないための鍵概念が「贈与」であった。

中沢新一によれば，贈与とは次のような原理を持つとされる。

① 贈り物はモノではない。モノを媒介にして，人と人との間を人格的ななにかが移動しているようである。

② 相互信頼の気持ちを表現するかのように，お返しは適当な間隔をおいておこなわれなければならない。

③ モノを媒介にして，不確定で決定不能な価値が動いている。そこに交換価値の思考が入り込んでくるのをデリケートに排除することによって，贈与ははじめて可能になる。価値をつけられないもの（神仏からいただいたもの，めったに行けない外国のおみやげなどは最高である），あまりに独特すぎて他と比較できないもの（自分の母親が身につけていた指輪を，恋人に贈る場合）などが，贈り物としては最高のジャンルに属する（中沢 2003: 38-39）。

これは以下の「交換」の原理と対極になっている。

① 商品はモノである。つまり，そこにはそれをつくった人や前に所有していた人の人格や感情が含まれていないのが原則である。

② ほぼ同じ価値をもつとみなされるモノ同士が，交換される。商品の売り手は，自分が相手に手渡したモノの価値を承知していて，それを買った人から相当な価値がこちらに戻ってくることを，当然のこととしている。

③　モノの価値は確定的であろうとつとめている。その価値は計算可能なもの（＝値段）に設定されているのでなければならない（中沢 2003: 35-36）。

交換の原理に立つならば，ある行為をする場合，得られる対価は，その行為にかかった労力よりも上回っていなければならない。同じ商品を買うのであれば，一円でも安いものを買おうとする。そういう禁欲的で，利己的な態度が必要になる。そして対価は，すぐ，できればその場で返ってくることが期待される。

一方，贈与の原理に立つならば，ある行為をする場合に，対価としてもらえる「もの」が重要なのではない。むしろ，その「もの」の持つモノガタリや，その「もの」に込めた贈り手の気持ちが重要である。そして贈与に対するお返しは，同時にではなく未来に引き伸ばされる。適当な間隔でやり取りされることで，相手との間に生まれる持続的な「信頼」が生まれる。交換と贈与の関係は，賃労働とボランティアの関係とパラレルに考えることもできるだろう。

さて，ボランティア実習と銘を打っている Go West であるが，実際はじめて現地を訪問した学生ができることは，ほんのわずかである。むしろ受け入れ団体が，初めて来るボランティアのために仕事を作り，サポートを行う。特に，普段の生活とは環境が大きく違う土地を訪問する，参加学生には慣れないことが多く，土地の人の手や足，知恵を借りることになる。ここで彼らは，何かをしに来た自分が，何かをしてもらっていることに気付く。この「ボランティアの失敗」とも言える状況に気付けるのかが，重要であると考える。

2009 年に二回目に参加した学生は次のように書いている。

“農と贈与とアートの旅”というテーマであった 2008 年の GO WEST，郡上八幡に到着してすぐに下駄をいただき，『贈与』という点でわたしたちはどうしたらこのお返しが出来るのだろうかと少し困ってしまった。しかし，戸塚まつりに郡上舞紫の皆さんをお招きしたり，このように後輩たちも連れてもう一度郡上八幡を訪れて GO WEST つながった人や土地と関係を持ち続けたりということで，少しずつでもお返しが出来るのではないかと思った[12]。

1 年目にお世話になったことをその場で返す（交換する）のではなく，時間をかけて，力をつけて，例えば学園祭で郡上八幡からお囃子集団を向かい入れるホストとして，白金グローバルフェスタに出店した郡上八幡ブースの手伝いとして，あるいは 2 年目の訪問の際に下級生を連れていく先輩として，今度は自分が贈与する側に立つ。もちろん，2 年目も現地の人にお世話（贈与）されることになるから，次にまた別の時間で贈与の機会を探る。それを繰り返しつつ，関係を持続する。

3-4　Go West における危機

Go West において，危機と言える状況は度々訪れる。例えば，Go West 2009 では，郡上八幡 3 日目の夜に事件が起きた。以下，その日の僕のフィールドノートから引用する。

【ノート 1　宗祇水神祭りの夜】

この日は，本町で執り行われる宗祇水神祭と，それに縁って行われる郡上おどりの準備の手伝いをした。本町の自治会の方々と宗祇水や周辺の側溝，河原の掃除，夜に行われる水中花火を下流に流れないようにする石の堰づくり，そして踊り客のための茶室や浴衣コンクールの設営などを行っ

た。ここで他のメンバーよりも動けず，また休憩時間などでも本町の方々とあまり会話ができなかったと反省するミスを中心に，夜のミーティングが終わった後，男子達が集まって「しゃべり場」的空間になる。会話は夜が更けるまで続き，隣の部屋で寝ていた僕も途中から会話に，2時半まで付き合わされる。自分自身も同年代のころには同じようなことを悩んだのだが（たとえば集団の中でうまく動けないとか，今にして思えばささいなこと），彼らにとっては深刻な問題で，また集団生活で逃げ場もないのでアップアップとしている。結局時間をかけて自分で答えを出さないとしょうがないと思うので，答えは出さず，ただ思ったことを少しだけ語る。

このような「危機」のうち，もっとも印象深い事態は，Go West 2008の最後の夜に起った。この日，受け入れ団体であるココルームが運営するインフォショップカフェcocoroomで，サバイバルキャンプを含めたこれまでの旅の土産話をする会を行った。カフェに集まったお客さんたちに対して，学生たちは旅の間撮った写真をプロジェクターで投影しながら，その土地の想い出や出会った人のエピソードを語った。以下，その日の僕のフィールドノートから。

【ノート2　2008年8月27日cocoroomでの報告会】

カフェのお客さんに，見沼，静岡，郡上八幡と明るく楽しく，身近なものとして語っていた彼女達が，釜ヶ崎の話になった途端に，言葉がつまる。かろうじて出した，「路上生活者が多いのにショックを受けた」とか，「自分の暮らしているのとは，別世界のように感じた」という率直にして，軽率な言葉が，釜ヶ崎やその周辺に住み，日雇い労働をしたり，労働者支援をしたりしている人びとの気持ちを傷つける。日中，釜ヶ崎の町を，紙芝居集団「むすび」のメンバーの方に案内してもらって歩いた。その感想として語られた，「子どものための公園が，野宿者のテント村になっているのはおかしい」というGWメンバーのクラシの言葉を受けて，あるお客さんが「それでは，野宿している人を何処かに追い出せということか」という質問を投げかける。それをきっかけに，それまで黙っていたお客さんたちは，学生たちに対して感想をなげかけていく。学生たちはそれに応えていくが，なかなか言葉にならない。そして何人かが涙を流す。沸騰するその空間の中で，僕は手に汗握りながら，それでも何かを期待していた。「自分と違う世界」と線を引いたその境界が，一瞬だけ引き裂かれて，異なるものとされたもの同士が交じり合った。ただ一瞬だけかもしれないけれど。

学生とお客さんとのやり取りの中で，釜ヶ崎では，東京でもう遊び場になっていない「道路」が遊び場になっていること，別世界だと思っている自分達の町ではより洗練された形で野宿者を排除しているのではという話に至った。これは僕の住む浦和の町でも，花壇やビオトープなどの排除系オブジェがつくられて，野宿者が排除されている。釜ヶ崎・西成で見えやすくなっているものが，実は自分たちの町にも分かりにくい形で存在している。

最後，「見沼で一週間汗をかき，静岡で大自然に交わって，郡上で水と町並みの綺麗な環境で踊りにエキサイトして，ゴチャゴチャした釜ヶ崎で締める。浩平君も学生さんだます悪人や」と言って，ココルーム代表の上田假奈代さんに笑われる。

報告会が終わって，地元の人と学生達との間で輪がいくつもできて，夜が更けるまで話が続く。

クラシは「野宿者を追い出せということか？」と質問したおっちゃんに，「にいちゃんは綺麗ごとにしないで，素直にモノを言う。実は俺も最初あの公園に行ったときは同じことを思った。思ったことをまず素直に語るのは偉い」と言われて褒められ，その後長いこと二人で言葉を交わしていた。

日にちが経ってまとめを行った後，当事者のいない，現場にいない，大学でやる報告会と違って，旅の終わりに，当事者のいる現場で語る場になった。そのことにどれだけの意味があったのか，正直まだよく分からない。語った後で，深く交わり，肌で感じて，そして黙った。

この報告会を経験した学生は一年後に次のように語っている。

> こどもの里は，私が想像している以上に，様々なことを考えさせられた。とりまとめ[13]で言ったことと多少重なる部分はあると思うけど，まずは「路上の見方」が面白かった。前日に行われた町歩きでは，その町の雰囲気に圧倒され緊張感を持って歩いていた。しかし，その同じ路上は，子どもたちにとっては単なる遊び場。緊張感も，子ども達が怪我をしないようにという緊張感であり，目的や一緒にいる人が違うと，路上の見方もこんなに変わるのだと，改めて思う[14]。

彼女は，この年，2回目の釜ヶ崎の町歩きを経験している。

その最中，町に佇んでいる男性に「見世物じゃないで。お前らカマのことなめているのか？」と言われた。案内してくれる方が，「ボランティアで来て，勉強させてもらっています」と答えたが，それでも絡まれ続けた。別の男性がその姿を見て，「兄ちゃん，そんな男（男性は酒を飲んでいた），かまったらあかんで」と言い，それを契機に，僕らはその場を去った。このようなエピソードもあり，彼女はまた町の雰囲気に圧倒されている。しかし，この町に生きる子どもたちにとって，彼女が緊張感を感じた路上が，単なる遊び場であることに気付く。釜ヶ崎に住む子どもと出会うことで，「怖い場所」と思っていた釜ヶ崎に，別の見方ができるようになる。そして，釜ヶ崎の町を怖いと思っていない自分を見出す。

別の学生は，次のように書いている。

> 今年のGo west（筆者注：Go West 2009のこと）は去年より明らかに発展していた。でも，そのぶん苦い想いはあまりしなかった，わたしだけかな。去年のGo Westで釜ヶ崎で手に汗握って，逃げ出したいと思いながらも，未熟な自分たちをぶつけたときの，あの苦さがあったから今があると思う。そして，何にも見えなかったけどどうしようもないドキドキわくわく感があって，苦い思いもしたけれど，心の奥の方があったまるようなこともあって，去年の夏を振り返ってレポートを書いたとき，なぜだか一人でボロボロと泣いたのを今でも覚えている[15]。

Go Westに参加してからいつも思うことは，人との縁は2度目からということ。人との関係性って深くなればなるほど面倒くさいものでもある。「あの人がいるから」とか「あの人にお礼をしなくちゃいけないから」といって多少無理することもある。

大学の授業での先生や勉強の対象との関係は自分が興味を失ったり，授業のタームが終わってしまえば簡単に切ることができる。そういう関係性しか持たないことはある意味では賢いし，

楽なのかもしれない。でも，面倒くささこそ関係性の深さの証だし，だからこそ見えてくるその人やものごとの本質があるはずで，そういったときに初めて「出会った」と言えるのではないだろうか。そう考えるとわたしの人生で「出会った」と言える人は少ないと思う。多いことが良いことというわけではないが，人と「出会う」ことができるのが，大学の授業という枠を超えたGo Westの一つの意味なのだと思う[16]。

彼女は，危機に直面し，それを乗り越える中で，Go Westの贈与のサイクル，信頼のサイクルに入ったと言える。

4　ひとまずの結びとして：メディアとしての旅と，ストリートの思想

学生，教員，受け入れ先の持続的な信頼関係によって生まれるGo Westは，大学の，あるいは教員としての猪瀬浩平によるプログラムというよりも，大学の内外の様々な人々によって構成されるプログラムであると言える。熊倉敬聡の言葉を借りれば，「活動の場，目的＝手段，価値，悦び等がある単独の主体だけに属するのではなく，それが複数の人間の間で同時に共有されるような活動＝協働（熊倉 2003: 10）」である，と言える。ここにおいて，旅は人と人，人と場所，場所と場所とを結びつけるメディアになる。

そのように旅する地平を，「ストリート」と呼び変える。毛利嘉孝によれば，90年代以降，渋谷のストリート，代々木公園，新宿西口地下に代表される路上空間が，管理の網の目に取り込まれていく都市空間の中の新たな公共空間として浮かび上がってくる。そして，この公共空間は，大学のように囲われ，固定された空間ではなく，たえず移動を強制される，一時的で不安定な空間である。けれども，その特徴のために，これまでに大学という公共圏にはあまりアクセスできなかった人々を巻き込むことが可能になった（毛利 2009: 148）。

そのうえで，現在生まれつつあるストリートの思想について，彼は次のように整理している。

第一に，「ストリートの思想」とは，点と点とをつなぐ「線」の思想である。ストリートとはなによりも移動の場なのだ。伝統的に思想と呼ばれるものの多くは，大学の研究室や自宅，図書館など，囲い込まれた空間である「点」において生産されてきた。それに対して，大学の研究室，自宅，図書館，職場，レストランやカフェ，ライブハウス，公園，駅といったさまざま点を横断するところに「ストリートの思想」は生起する。それは，常に過渡的な思想のあり方であって，その体系は事後的にしか把握できない。

第二に，「ストリートの思想」とは，ボトムアップ型の実践から生まれる思想である。先に思想や理論があり，それにしたがって実践が生まれるわけではない。具体的な行動や実践が先に存在し，それ自体がひとつの思想なのである。この思想は人を動かさない。人が動くことで思想が生まれるのだ。

したがって，「ストリートの思想」は大学のような既存の権威と無縁であるだけではなく，人々を統一し，動員しようとする指導的な思想や党派的な思想とも対抗的な関係にある。

第三に，この「ストリートの思想」は，複数の思想である。伝統的に思想には，一人の名前が冠されることが多い。マルクスの思想，丸山眞男の思想，フーコーの思想……。それに対し

て，「ストリートの思想」の多くは匿名の思想である。複数の無名の人々が作り出す思想。あるいは，特定の固有名が冠される時でさえも，その思想は，複数の人々をつなぎ合わせたり，組織したりすることを通じて生み出されたものだ。ストリートの思想家とは，オーガナイザーであり，一種のプロデューサーなのだ。

最後に，「ストリートの思想」は，伝統的な思想のように書籍や論文，活字テキストによってのみ表現されるわけではなく，音楽や映像，マンガ，あるいはダンスカルチャーなど非言語的実践を通じて表現されることも多い。（毛利 2009: 20–21）

この諸特徴について，大学の授業として設計されたGo Westの旅が共有していると理解したうえで，最後の「表現」について少しだけ書く。

2009年度のGo Westの報告会は，戸塚まつりの郡上おどりでお世話になっている善了寺で行った[17]。ココルームスタッフの原田麻以氏をゲストに招き，学生や教職員ばかりではなく，報告会を共催したカフェ・デラ・テラの人々や地域の人々が参加した。Go Westメンバーたちは，パワーポイントに頼らず，釜ヶ崎を学生が出会った人やものを，詩とパフォーマンスで表現し，その後パネルディスカッション方式で，一人一人が自分の感じた釜ヶ崎を語った。それを聞いた，ボランティア特別研究101を履修する1年生の感想が以下である。

報告会の始まりとともに，電気が消されて，キャンドルの光とスライドショーの光だけになった。キャンドルの光はゆらゆら揺れて，とても幻想的な空間を作り出していた。一番手だった純一さんのパフォーマンスが良かった。報告会と言うと，私の中では，原稿用紙を片手に，書いてある文章をひたすら読み続けるようなイメージがあったから，純一さんの段ボールパフォーマンスは，私の持っていた型にハマったイメージをぶち壊してくれて，これがGO WESTなのか！と思わせてくれた。それに，段ボールを使うことで，釜ヶ崎の野宿労働者の方々のことを少し意識した。私はまだ何も知らないけれど，もし自分が釜ヶ崎に行くことになったら，彼らとどんな繋がりを持てるのだろうかと少し考えた。段ボールは意外と温かかった。自分がこうしている今，まさに釜ヶ崎の労働者の方々は私たちが座っているこの段ボールで寝たり，寒さをしのいだりしているのでは，とも思った。

一年目の8月に釜ヶ崎で多くが涙し，僕自身が手に汗を握った「危機」があり，二年目の8月に釜ヶ崎の半路上で行った報告会があったから，大学の周辺でのこの表現が生まれた。常に過渡期で，人が動くことで，複数の人びとによって生まれ，時に危機に遭遇し，そしてその暫定的成果は言葉だけではない媒介で語られる，Go Westという終わりなき旅についてのひとまずの語りを，ここで結びたい。

注

（1） 2008年12月24日文部科学省中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（答申）」より。ここにおいて，「学士力」の主な内容は，①「知識・理解（文化，社会，自然等），②「汎用的技能（コミュニケーションスキル，数量的スキル，問題解決能力等）」，③「態度・志向性（自己管理力，チームワーク，倫理観，社会的責任等）」，④「総合的な学習経験と創造的思考力」とされている。

（2）「あえて危機を引き起こすような動機が文化の中に潜んでいて行動の源泉になる。まさにそこが，未知の新しい現実が起こってきたときにそれを乗り越える技術を個々人が学ぶ場であって，それが

文化であるということになる」(山口 2009：179)。

(3) ここにおけるアートは，日常の交流とは別の形で人と人とをつなげる方法と捉えられる。

(4) 2009 年度春学期は，以下のようなスケジュールで授業を行った。

① 4 月 8 日ガイダンス（リーダー決定，グループ分け）／② 4 月 15 日ワークショップ 1（写真を撮る／訪問先課題文献の配布）／③ 4 月 22 日ワークショップ 2（写真を観る，写真で語る：効果的な自己紹介とは）／5 月 12 日授業外　NPO 法人こえとことばとこころの部屋代表　上田假奈代さんのトークライブ（於　白金キャンパス）に参加／④ 5 月 13 日上田さんトークライブの感想の共有＋実習時の役割分担の決定／⑤ 5 月 15 日～16 日　白金グローバルフェスタ全体，郡上八幡ブースの手伝い／⑥ 5 月 20 日白金グローバルフェスタでの経験の共有＋ディスカッション／⑦ 5 月 27 日ゲスト講演　見沼田んぼ福祉農園とサバイバルキャンプ　ゲスト　見沼・風の学校スタッフ倉島康司さん＋学生文献発表（小松光一『自給と産直で地域をつくる』）／5 月 30 日授業外　郡上おどり in 戸塚まつり＋善了寺に参加／⑧ 6 月 3 日郡上おどりでの経験についての共有＋ディスカッション＋学生文献発表（足立重和「ノスタルジーを通じた伝統文化の継承：岐阜県郡上市八幡町の郡上おどりの事例から」『環境社会学研究』10／⑨6 月 6 日～7 日見沼田んぼ福祉農園実習／⑩ 6 月 10 日学生文献発表（足立重和「伝統文化の説明：郡上おどりの保存をめぐって」片桐新自編『シリーズ環境社会学 3 歴史的環境の社会学』新曜社＋上田假奈代「ホームレスと表現。自立・自律の試み：新世界での取り組み」『現代思想』34（9）＋水内俊雄「釜ヶ崎 1999 年展開と多様な市民知の邂逅」『日本ボランティア学会 2007 年度学会誌』）／⑪ 6 月 24 日各担当地域に分かれて実習準備／6 月 28 日授業外　郡上おどり in 青山に参加。終了後，釜ヶ崎のカマン！メディアセンターとスカイプ会議／⑫ 7 月 1 日郡上おどりとスカイプ会議を踏まえたディスカッション／⑬ 7 月 8 日各担当地域に分かれて実習準備／⑭ 7 月 15 日ミーティング（行動計画の確認・しおり原稿の割り振り）

(5) 2008 年度は，サバイバルキャンプ 2008 に 8 月 10 日～16 日まで参加した。ただし，この年は 2 泊 3 日以上の参加で可としたため，一週間参加したのは一名のみで，後は 2 泊 3 日の参加。その後，8 月 22 日～28 日まで，静岡興津の山梨みかんトラストファーム，郡上八幡，釜ヶ崎にそれぞれ 2 泊 3 日で滞在した（Go West 2008 農とアートと贈与の旅）。

(6) 以下が，一週間の行動である。

〈1 日目　8/9〉
【昼】 開会式　ベースキャンプ設営　農園作業
【夜】（勉強会）福祉農園の仲間を知る「福祉農園で活動する障害者団体の活動」

〈2 日目　8/10〉
【昼】 畑作業，竹小屋のリフォーム
【夜】（勉強会）福祉農園の根源を知る「埼玉の障害者運動の歴史」

〈3 日目　8/11〉
【昼】 畑作業，（勉強会）病害虫講座
【夜】 見沼・風の学校　畑会議

〈4 日目　8/12〉
【昼】 畑作業，ハーブ園作り，農機具メンテナンス講座＋地元農家への援農
【夜】（勉強会）地域を知る　地元若手農家を迎えて

〈5 日目　8/13〉
【昼】 畑作業，ハーブ園作り，環境整備＋地元農家への援農
【夜】（ワークショップ）こころのたね～場所の力を呼び起こす～

〈6 日目　8/14〉
【昼】 畑作業，ハーブ園作り，環境整備
【夜】 打上げ

〈7 日目　8/15〉
【昼】 片付け

(7) なお今年は，日本ボランティア学会会長で，社会学者の栗原彬氏が京都から同行した。

(8) 大阪市および大阪府から NPO 法人釜ヶ崎支援機構が委託をうけて，釜ヶ崎の 55 歳以上の日雇い労働者を雇用して，大阪市内及び府下の施設や道路などの除草・清掃や，保育所の遊具のペンキ塗りなどの作業を実施する（釜ヶ崎支援機構ホームページ http://www.npokama.org/summary/teikyo/teikyo.html から）。

(9) ここでの信頼は，山岸俊男の以下の定義によっている。「信頼は人々の間の，あるいは組織の間の関係を可能にする社会関係の潤滑油であり，信頼なくしては，社会関係や経済関係を含むすべての人間関係の効率はいちじるしく阻害されることになる。この意味で，信頼は個人の生活を豊かにしてくれる私有財としての関係資本（social capital）であると同時に，我々の社会を住みやすい場所にしてくれる公共財としての関係資本である」(山岸 1998：ⅰ)。

(10) またそれぞれの実践共同体は，僕がこれまで見沼田んぼ福祉農園の活動を通じて出会ってきた団体である。

(11) Go West 2008 年に参加した，社会学科 3 年石塚佳和の 2008 年度提出レポートから。なお，以下それぞれの学生の学年は 2010 年 1 月 1 日現在の学年である。

(12) Go West 2008，2009 参加の社会学科 3 年菊地由花の 2009 年度提出レポートより。

(13) Go West 期間中，毎日夜に行うミーティング。一人一人が，その日の感想や気付いたことを語り，全体で共有する。

(14) Go West 2008，2009 参加の社会学科 3 年七海莉佳のこどもの里訪問記録より。

(15) Blog「Go West な日々」http://gowesto8.exblog.jp/11735054/（2010/01/07 取得）より。

(16) Go West 2008，2009 参加の国際学部 3 年柳島かなたの 2009 年度提出レポートより。

(17) 2008 年度の報告会は，Art on Campus の一環として，キャンパス内の建物に展示をしつつ，Go West で出会った多様な人が交わる車座の場の再現を横浜キャンパスの広場にテントを張り，炬燵を設置することで行った。

参考文献

熊倉敬 2003『美学特殊C：「芸術」をひらく，「教育」をひらく』慶応義塾大学出版会

セネット，リチャード 1975『無秩序の活用』（今田高俊訳）中央公論社

中沢新一 2003『愛と経済のロゴス　カイエ・ソバージュⅢ』講談社

原口剛 2009「「うんどう」としてのココルーム」NPO 法人こえとことばとこころの部屋（編）『URP GCOE DOCUMENTS6 記憶と地域をつなぐアートプロジェクト：こころのたねとして　釜ヶ崎 2008』大阪市立大学都市研究プラザ

水内俊雄 2008「釜ヶ崎 1999 年転回と多様な市民知の邂逅」『日本ボランティア学会 2007 年度学会誌』pp. 16–29

毛利嘉孝 2009『ストリートの思想：転換期としての 1990 年代』日本放送出版会

山岸俊男 1998『信頼の構造：こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会

山口昌男 2009『学問の春：〈知と遊び〉の 10 の講義〉』平凡社

関連ホームページ

Go West な日々（Go West 学生メンバー作成のブログ）http://gowesto8.exblog.jp/